

はしがき

本書は、二〇一四年六月、立教大学において開催された日本西洋史学会六四回大会小シンポジウム「古代地中海世界における聖域と社会」の報告者、司会者を中心に、それぞれがその後の研究の進展を踏まえて稿を整え、足りないヘレニズム時代についてラザフォードさんの寄稿と竹尾美里さんの労訳業を得ながら一書となしたものである。

序章においてその一端を示そうとしたように、古代地中海世界は、ひとつの世界として人類史上、前例のない規模で高度な文化と複雑な社会経済関係が発展することを許し、宗教やひとびとの信仰を多様な方向に展開させた世界であった。「宗教の闘技場」にもたとえられるこの世界を、同じユーラシア大陸の西半分で展開したオリエント世界と一続きのものにとらえれば（実際、かなり重なっている）、そこには、やがてキリスト教とイスラム教という、いわゆる「三大世界宗教」のふたつが拮抗する中世世界が育っていくことになる。

古代地中海世界に残るひとびとの宗教的実践や信仰の多様な痕跡は、多彩な文献・記録史料や考古・美術資料に残り、それらの宗教現象は、これまでさまざまに論じられてきた。関連書物や研究論文も、内外で枚挙にいとまがない。そうした中、そこで宗教祭儀が執り行われ、やがて信仰告

白の言葉が発せられるようになる「聖域」という場Ⅱ空間に注目してみたら、中世世界を準備した古代地中海の豊かな宗教現象に対する見方に、何か新しい地平が開けるのではないかという期待が、先のシンポジウム企画の背景にはあった。キリスト教・イスラム教・仏教といった世界宗教がひとびとの心や思考を支配するようになる以前、ひとびとはどこで何を感ず、考え、信じていたのか。また、どのような場で、安心を求め、反復行為としての「祭儀」を超え、「信仰」の名に値する言語的・内省的な精神活動を生みだしてきたのか。「聖域」空間に注目した本書は、ギリシア・ローマの政治や社会にも説きおよび、いわば「社会空間の精神史」の試みとなることを目指している。

各著者によりアプローチはさまざまである。上野論文や田中論文のように、特定の時代を切り取り、その中における社会と「聖域」の構造的動態を読み取ろうとする論考があれば、奈良澤論文や中川論文のような、社会Ⅱ「聖域」関係の通時的動態に注目する論考もある。師尾論文や藤井論文のように、「聖域」をめぐるいくつかの重要な社会現象を史料に寄り添いながら丹念に跡付けようとする論考、ラザフォード論文のように、「聖域」を媒介とした社会関係の骨組みを理論的に明らかにしようとする論考、さらに、定点観測による視線の一貫性に価値を見出すそれから、概観の見通しのよさを尊しとするそれまで、実にバラエティに富む。構成は、古典期のアテナイを中心とするギリシアから始まり(Ⅰ)、ヘレニズム時代のギリシア・エーゲ海域(Ⅱ)、ローマ共和政時代から帝政時代にかけてのイタリアと帝国東部(Ⅲ)が続き、古代末期以降ビザンツ時代までの東西ローマ帝国(Ⅳ)で結ぶ、という類書の伝統に則った配列を取り、全体として、幅広い時代

と地域を扱うよう配慮している。加えて、編者が担当した序章では、「聖域」の起源までも視野に入れ、さらに大きな時間軸の中で古代地中海世界の「聖域」がどのように位置づけられるかということについて仮説的な見通しも示した。

その一方で、巻末に掲げた地図をご覧になればお分かりいただけるとおり、広大な地中海世界のこと、扱う地域に偏りが出るのは不可避であり、本書全体を通じて、エジプトの大半とキレナイカ（東リビア）を除く東地中海地域が一大焦点になっている。西ではアフリカ（チュニジア、アルジェリア）とヒスパニア（スペイン）、北フランスとブリタニアに論及されず、イタリアはローマ近郊の一聖域、ガリア（フランス）も南フランスに記述が限られる。これは、ギリシア・小アジア・シリアと島嶼部、ローマ近郊と南仏以外の地域が取り上げるに値しないからというわけでは決していないが、だからといって、扱う地域が、著者たちの都合によって恣意的に選ばれているというわけでもない。さして数多くない日本の西洋古代史研究者には、時代ごと、古代地中海世界の姿をよく知りうる地域を研究の対象にしようという意識は強く、世界の学界における研究のトレンドに鋭敏に反応して、「聖域」の展開にしかるべき意義を認めうる地域を慎重に選んだ結果とお考えいただきたい。今ここで一般的にのみ述べておくなら、各論者は、「聖域」をめぐる重要な社会現象や社会的諸関係を知りうるための史資料、特に重要なそれらが多く残されたところの「聖域」を論及の対象に選んでいる。そうした現存史資料の多さにこそ、それらの「聖域」をめぐる古代特有の宗教的社会現象や社会関係が活発に形成された事実が反映されている、と編者は理解している。

*

さて、以上が本書についてあらかじめ述べておくべきと思われるはしがきだが、編集作業にもめどが立ってきたころ、勉強出版編集部の豊岡愛美さんから、ひとつの要請をいただいた。地中海世界の神々と聖域に比較的なじみのない読者の方々が、本書ではじめて出会う様々な神格や聖域について、本書の各著者が種々の理由で十分な説明を与えていない場合、どのようにしてそれらを調べたらよいか、事例を挙げて具体的に示してほしいというのである。なるほど、本書は、研究の最前線にいる我が国有数の若手研究者からの寄稿を中心に編んだ専門論集であるから、それらの点の説明はややもすれば不親切であろう。また、幼いころからギリシア・ローマ神話や英雄伝になじんでいる欧米の読者ならまだしも、我が国の若い学生諸君がゼウスの聖域だ、アルテミスの神殿だと言われて、ピンとこない可能性は多分にある。本書を手にしてくださる読者の方々は、もちろんギリシア・ローマの神話や宗教に多少なりとも興味をお持ちのみなさんであろうから、すべての神々や聖域について説明は煩瑣に過ぎようが、少しでも神話などに興味を持った若い読者の方々なら、ひとつ例を挙げてみるだけで理解や興味の持たれ方も違ってくるかもしれない。そこで、試しに、本書のいくつかの論文に現れる「アポロン」とその「聖域」について、学生諸君が最も慣れ親しみ、真つ先に検索するであろうインターネット事典、ウィキペディアに当たってみた。

この事典は、特に英語のページが、読者の多さも反映して充実していることが知られているが、

まず、最初にアクセスするであろうその日本語のページで検索してみる。ここでは、アポローン（アポロンで検索するとアポローンの項目に移動してくれる）が、ゼウスを父、レトを母とし、アルテミスを双子の姉妹とするオリンポス一二神の一柱であり、詩歌の神、羊飼いの守護神、疫病と治癒の神であると同時に、予言の神でもあることが述べられる。この最後の情報は、本書で、「アポローンの神託（所）」に言及される時、あらかじめ知っておくと理解の助けとなる重要なそれである。予言の神であるからこそ、ギリシアの共同体や人々は、自らの未来の運命についてアポローンに尋ね（ることが多かつた）たのである。この項目は、引き続き、信仰の起源についての様々な学説、属性、神話におけるエピソードなどを一通り取り上げてから、「信仰」の項で、代表的な聖域としてデルポイの神託所と聖域にまつわるエピソードを挙げ、そこで行われるピュティア大祭について説明し、そのほかの代表的聖域としてデロス島のアポローン聖域、ディデイマのそれがあることに触れて、主要な解説を終える。なかなか行き届いた事項解説というべきで、各地の高名な聖域についても触れ、ピュティア大祭がギリシアの各国からひとびとを集めたことや諸国の親善に寄与したことなどにも触れていて要を得ている。取り立てて目くじらを立てるような過不足はないといえるであろう。ただ、読者の興味が、なぜ、デルポイ、デロス、ディデイマのアポローン聖域がとりわけひとびとの崇拜を集めたのか、という点に及ぶとき、そこから得られる情報は多くない（デロスについてのみ、アポローンの生誕地とされた、との短い解説が付く）。また、アポローン以外の神々からは神託は得られなかったのか、あるいは他の神々の祭礼との関係はどのようなものであったかなど、関心が拡がれば

拡がるほど、事項解説という事典の弱点が露呈する。少なくとも、この項目の日本語版の作成に携わったひとたちは、日本人向けにはそこまで説明する必要なし、と判断したようである。

それでは、英文のページはどうであろうか。やはり書き出しからして力の籠もり方が違う。ギリシア語の様々な方言での表記の違いを列挙しつつ、「オリンポスの神々のうちで最も重要で複雑な神のひとつ」と述べて始める。説明事項が詳細に及ぶことの予告であるが、実際記述は長大で、アポローンの性格や添え名を延々と網羅し、起源についてもその多元的な性格を微細に述べていく。本書に関係ある神託や祭儀、聖域についても、一三の神託所と二六の神殿を列挙し、それぞれに短いコメントをつける。神殿については、プラン上の発展が論じられるため、平面図が付されたものすらある。それぞれの所在の地名にはリンクが張られているから、さらに詳しく知りたい方は、クリックしさえすれば、そちらに転送される。アポローンにまつわる神話についての詳細なリストが続いた最後には、一九四三年から二〇〇五年までの一六冊の代表的研究が参考文献として挙げられる。全体では、二〇〇近い出典註が施されている。――

日本語のページをはるかに上回る豊富な情報量だが、まず日本語の項目を読み、さらに関心を深めて、上に述べたような疑問を持った人の役に立つであろうか。確かに、重要な情報はあつた。デロスのアポローンとデルポイのアポローンは来歴が異なり、ひとつの都市にそれぞれを起源とするふたつのアポローン聖域が並び立つ場合があつたということや、上記三つの高名な神託所のほかにもクラロスやパタラなどひとびとを集めた神託所が小アジアにあり、デロスでは夏に神託が発せられ

たのに対し、デロスからアポロンが最初に移ったとされるパタラでは冬に発せられたといったようなことである。しかし、その一方、そうしたアポロン自身にまつわる由緒ある神託所のほかに、トロイア戦争でコリントスに捕虜として連れてこられたひとびとがテネアという都市内集落を形成し、そこでアポロン・テネアトスとして祀った聖域が神託所となった、というような、さらに初学者を混乱させそうな来歴を持つ神託所も挙げられている。また、本書の序章で、編者が名前だけ言及しているアポロン・ライルベーンノスの聖域などは、実際に訪れてみると、マイアンドロス川を見下ろすなかなか立派な神殿だが、そのようなローカルな聖域は、二六の神殿リストには取り上げられていない。すなわち、地中海世界にアポロンの神殿・聖域は、あまりに数多く、いかに情報を充実させようが、事典の事項で網羅的に列挙・解説することは不可能な一方、挙げている聖域も、なぜそこが取り上げられるのか説明がないため、結局、読者は、全体像がつかめず、かえって途方に暮れることになる。長大であるからこそ分かりにくい。不特定多数の匿名編纂者によって事項が執筆されることの宿命であると同時に、欠点であろう。

編者は、読者のみなさんに、本書で扱われる聖域や神格について、ある程度事典等で調べることはもちろんお奨めするが、どのような事典に当たっても、十分な予備知識が得られるというわけではなく、またその必要もないということ、あらかじめお伝えしておきたい。おそらく、古代地中海世界の神々や聖域は、古代日本の神々や聖域よりもはるかに理解しにくく、十分な予備知識を得たいと考えてもきりが無い。日本の場合、神話的出典は、『古事記』や『日本書紀』に限られ、し

たがって、あらかじめ得られる予備知識も、調べさえすれば、異論の余地のない程度に充実したものに足りるだろう。それに対し、古代地中海世界の場合、神話的出典は、ホメロスの『イーリアス』や『オデュッセイア』、ヘシオドスの『神統記』のような、高校の教科書にも取り上げられる作品に限られるわけではなく、ホメロス外伝にあたるような後代の文学作品や演劇、詩が多数残されており、それらの記述相互に齟齬や矛盾もある。遺跡になつて残っている聖域の数は、あまりに多く、祀られている神格を特定できない場合も少なくない。つまり、古代地中海世界の聖域や宗教現象は、どれだけ説明が進んだところで、なお多くの謎に満ちており、それゆえにこそ、世界中の一流の学者たちが興味を覚え、様々な方法を使つてそれらの説明に尽くしている。教科書的な記述には乗りにくく、最低限必要な予備的情報といつても、ウイキペディアの日本語ページに示された程度のそれしかないと言つておくのが誠実なところであろう。

研究という作業には、終わりの完成もなく、ひとつの謎を解明すれば、また新たな別の謎を生む。それは、永遠に *in progress* だが、しかし、日々進展していることは確実であり、そうした進展の一端をお見せしたいというのが本書の意図である。いま、こうして一書に結実したところから読者諸賢が何を得てくださるか、容易に予想できぬところながら、人間の行動や思考に、宗教が極めて強い影響を与えていた古代という時代ならではの宗教的諸現象に、多様なアプローチや多彩な問題発見のきっかけが潜んでいるということを知つていただければ、と思う。上にお名前を挙げた豊岡さんをはじめとして、シンポジウムで司会を務めてくださった法政大学の後藤篤子さん、青山学院

大学の阪本浩さん、中央大学他の志内一興さんら、執筆者一同、お礼を申し上げなければならぬ方々は数多い。シンポジウムからはじまり、本書の上梓に関わってくださったすべての皆さんに心からの感謝をささげる。

編者記す

目次

はしがき……………浦野 聡 i

序章 古代地中海聖域の精神的・身体的トポグラフィ……………浦野 聡 1

I 古代ギリシア

第一章 郊外——古典期のアテーナイ……………上野 慎也 49

第二章 奉納物からみた聖域と社会……………師尾 晶子 107

II ヘレニズム

第三章 ネットワーク理論と神聖使節団テオリアのネットワーク

……………イアン・ラザフォード／訳・竹尾 美里 141

地図……………408

年表……………411

ローマ皇帝在位表……………412

図版転載元一覧……………(14)

執筆者一覧……………(11)

索引……………(1)